

ホームズとまで讃嘆してゐる。その得意の絶頂にある所の同氏を、此處に奈落の底まで叩き落すことは、私も餘り氣持がよくはない。實際、私は黒田氏が、我國の警察の仲間では、最も優れた手腕家であることを信ずる。この度の失敗は、他の人々よりも頭がよかつた爲の禍である。同氏の推理法に誤りはなかつた。唯だ、その材料となる所の觀察に缺くる所があつた。即ち綿密周到の點に於て私といふ一介の書生に劣つて居つたことを、氏の爲に深く惜むものである。それはさて置き、私が提供しようとする所の證據物件なるものは、左の二點の、極くつまらぬ品物である。

一、私が現場で收得した所の一枚のPL商會の受取切符（三等急行列車備付けの枕の代金の受取）

二、證據品として當局に保管されてゐる所の博士の短靴の紐。

唯だこれだけである。讀者諸君にとつては、これが餘りに無價値に見えるであらうことを慮れる。が、其道の人々は、一本の髪の毛さへもが、重大なる犯罪の證據となることを知つて居らるであらう。

實を申せば、私は偶然の發見から出發したのである。事件の當日現場に居合せた私は、検死官

達の活動を眺めてゐる間にふと、丁度私が腰を下して居つた一つの石塊の下から、何か白い紙片の端が覗いてゐるのを發見した。若しその紙片に捺してある日附印を見なかつたなら、何の疑も起らなかつたのであらうが、博士の爲には、幸にも、その日附印が、私の眼に何かの啓示の様に焼付いたのである。大正——年十月九日、即ち事件の直ぐ前の日の日附印が。

私は五六貫目は大丈夫あつた所の、その石塊を取りのけて、二雨の爲に破れ相になつてゐた紙片を拾ひ上げた。それがPL商會の受取切符であつたのだ。そして、それが私の好奇心を刺戟したのである。

さて黒田氏が、現場に於て見落した點が三つある。

その内の一つは、偶然私に恵まれた所のPL商會の受取切符であるから、これを除くとしても、少くも二つの點に於て、粗漏があつたことは確かである。が右の受取切符とても若し黒田氏が非常に綿密な注意力を持つて居つたならば、私の様に偶然ではなく發見することが出来たかも知れないのである。といふのは、その切符が下敷になつてゐた石といふのは、博士の裏に半ば出来上つた下水の溝の側に、澤山ころがつてゐる石塊の一つであることが一見して分るのであるが、あの石塊が唯一つだけ遠く離れた線路の側に置かれてあつたといふことは、黒田氏以上の注意力

の所有者には、何かの意味を語つたかも知れないからである。そのみならず、私は當時その切符を臨検の警官の一人に見せたのである。私の深切に一顧をも與へず、邪魔だからどいて居れと叱つた所のその人を、私は今でも數人の臨検者の中から見付け出すことが出来る。

第二の點は、所謂犯人の足跡なるものが、博士邸の裏口から發して線路まで来てゐたが、再び線路から博士邸へ立歸つた跡はなかつたのである。この點を黒田氏は如何に解釋せられたかは——この重大な點について、心なき新聞記者は何事も報道しない故に——私には分らないが、多分犯人が犠牲者のからだを線路へ置いた後、何かの都合で、線路づたひに廻り路をして立歸つたとしても判断せられたのであらう。——事實、少し廻り路をすれば足跡を残さないで、博士邸まで立歸り得る様な場所が無くもなかつたのである——そして足跡に符合する短靴そのものが、博士邸内から發見せられたことによつて、假令立歸つた跡はなくとも、立歸つたといふ證據は十分備はつてゐるとても考へられたのであらう。一應尤もな考へであるが、其處に何か不自然な點がありはしないだらうか。

第三の點は、これは大抵の人の注意からされる様な、實際それを目撃した人でも一向氣に留めない様な種類のものであるが、それは一匹の犬の足跡が、その邊一面に、特に所謂犯人の足跡に

並行して、印せられて居つたことである。私が何故これに注意したかといふに、轢死人がある様な場合に、その附近に居つた犬が、而かも足跡が博士邸の裏口に消えてゐるのを見ると、多分轢死者の愛犬である所の犬が、この人だけの側へ出てこないといふのはをかしいと考へたからであつた。

以上私は、私の所謂證據なるものを、残らず列挙した。敏銳なる讀者は、私のこれから述べようとする所を、大方は推察せられたであらう。それらの人々には蛇足であるかも知れないが、私は兎に角結論まで陳述せねばならぬ。

その日歸宅した時には、私はまだ何の意見も持つてゐなかつた。右に述べた三つの點についても、別段深く考へて居つた譯ではない。此處には讀者の注意を喚起する爲に態と明瞭に記述したまでであつて、私が當日その場で、これだけのことを考へたのではないが、翌日、翌々日と毎朝の新聞によつて、私の尊敬する博士その人が嫌疑者として引致されたことを知り、黒田刑事の探偵苦心談なるものを讀むに至つて、私は、この陳述の冒頭に述べた様な常識判断から、黒田氏の探偵にどこか間違つた點があるに相違ないと信じ、當日目撃した所の種々の點を考へ合せ、尙ほ残つた疑點については、本日博士邸を訪問して、種々留守居の人々に聞合せた結果、遂に事件の

真相を掴み得た次第である。

そこで、左に順序を追つて、私の推理の跡を記して見ることにする。

前に申した様に、出発点は、PL商會の受取切符である。事件の前日、恐らく前夜深更に、急行列車の窓から落されたであらう所のこの切符が、何故、五六貫目もある重い石塊の下敷になつてゐたか。といふのが、第一の着眼点であつた。これは、前夜PL商會の切符を落して行つた所の列車が通過した後、何者かゞ、その石塊を其處に持つて來たと判断する外はない……。汽車の線路から、或は、石塊を積載して通過した無蓋貨車の上から、轉落したのでないことは其位置によつて明かである。——では、何處からこの石を持つて來たか、可成重いものだから遠方である筈はない。さしづめ、博士邸の裏に、下水を築く爲に置いてある。澤山の石塊の内の一つだといふことは、楔形に削られたその恰好から丈けでも明かである。

つまり、前夜深更から、その朝轢死が発見されるまでの間に、博士邸から轢死のあつた箇所まで、その石を運んだものがあるのだ。とすれば、その足跡が残つてゐる筈である。前夜は雨も小降りになつて、夜半頃にはやんで居つたのだから、足跡の流れた筈はない。ところが、足跡といふものは、賢明なる黒田氏が調査せられた通り、その朝現場に居合せた者のその外は「犯人の

足跡」唯一つあるのみである。茲に於て、石を運んだものは「犯人」その人でなければならぬことになる。この變テユな結論に達した私は、如何にして「犯人」が石を運ぶといふことに可能性を與へるべきかに苦しんだ。そして、其處に如何にも巧妙なトリツクの弄せられて居ることを發見して、一驚を吃したのである。

人間を抱いて歩いた足跡と、石を抱いて歩いた足跡、それは熟練なる探偵の眼をくらますに十分な程、似通つてゐるに相違ない。私はこの驚くべきトリツクに氣附いたのである。即ち博士に、殺人の嫌疑を掛けようと望む何者かゞ、博士の靴を穿いて、夫人のからだの代りに、石塊を抱いて、線路まで足跡をつけたと、斯様に考へる外に解釋の下しやうがないのである。そこで、この惡むべきトリツクの製作者が、例の足跡を残したとするならば、彼の轢死した當人、即ち博士夫人はどうして線路まで行つたか、その足跡が一つ不足することになる。以上の推理の當然にして唯一の歸結として、私は遺憾ながら博士夫人その人が、夫を呪ふ恐るべき悪魔であつたことを、確認せざるを得ないのである。戰慄すべき、犯罪の天才、私は嫉妬に狂つた、而かも肺結核といふ——夫れは寧ろ患者の頭腦を病的にまで明晰にする傾のある所の——不治の病に罹つた。一人の暗い女を想像した。凡てが、暗黒である。凡てが、陰濕である。その暗黒と陰濕の中

に、眼計り物凄く光る青白い女の幻想、幾十日幾百日の幻想、その幻想の實現、私は思はずもゾットしたのである。

それはさて置き次に第二の疑問である、足跡が博士邸に歸つて居なかつたといふ點はどうか。これは單純に考へれば、轢死者が穿いて行つた靴跡だから、立歸らないのが寧ろ當然な様に思はれるかも知れない。が、私は少し深く考へて見る必要があると思ふ。かくの如き犯罪的天才の所有者なる博士夫人が、何故に線路から博士邸まで、足跡を返すことを忘れたのであらう。そして、若しPL商會の切符が、偶然にも列車の窓から落されなかつた場合には、唯一の手懸りであつたであらう所の、拙い痕跡を残したのであらう。

この疑問に對して、解決の鍵を與へて呉れたものは、先に第三の疑點として上げた、犬の足跡であつた。私は、彼の犬の足跡と、この博士夫人の唯一の手ぬかりとを結び合せて、微笑を禁じ得なかつたのである。恐らく、夫人は博士の靴を穿いた儘、線路までを往復する豫定であつたに相違ない。そして改めて他の足跡のつかぬ様な道を選んで、線路に行く積りであつたに相違ない。が、滑稽なことには茲に一つの邪魔が入つた。といふのは、夫人の愛犬である所のジョンが——このジョンといふ名前は、私が本日同家の召使××氏から聞き得た所である。——夫人の異

様な行動を、眼ざとくも見付けてその側に來て盛んに吠え立てたのである。夫人は犬の鳴聲に家人が眼を醒して、自分を發見することを慮れた。グヅ／＼してゐる譯には行かぬ。假令家人は眼を醒さずとも、ジョンの鳴聲に近所の犬共がおし寄せては大變だ。そこで、夫人は、この難境を逆を利用して、ジョンを去らせると同時に自分の計畫をも遂行し得る様な、うまい方法を、とつさの場合に考へついたのである。

私が本日探索した所によると、ジョンといふ犬は、日頃から一寸した品物を銜へて用達をする様に教へ込まれて居つた。多くは主人と同行の途中などから、邸まで何かを届かせるといふ様なことに慣されてゐた。そして、さういふ場合には、ジョンは持歸つた品物を、必ず奥座敷の縁側へ置く習慣であつた。も一つ博士邸の訪問によつて發見したことは、裏口から奥座敷の縁側に達する爲には、内庭をとり圍んでゐる所の板塀の木戸を通る外に通路はないのであつて、その木戸といふのが、洋室のドアなどにある様なバネ仕掛けで、内側へ丈け開く様に作られてあつたことである。

博士夫人はこの二つの點を巧みに利用したのである。犬といふものを知つてゐる人は、かういふ場合に、唯だ口で追つた許りでは立去るものでないが、何か用達をいひつける——例へば、木

切れを遠くへ投げて、拾つて來させるといふ様な——時は、必ずそれに従うものだといふことを否まないであらう。この動物心理を利用して、夫人は、靴をジョンに與へて、其場を去らしめたのである。そして、その靴が、少くとも、奥座敷の縁側のそばに置かれること——當時多分縁側の雨戸が閉されてゐたので、ジョンもいつもの習慣通りには行かなかつたのであらう。——内側からは押しても開かぬ所の木戸にさゝへられて、再び犬がその場へ來ないことを願つたのである。

以上は、靴跡の立歸つてゐなかつたことや、犬の足跡其他の事情と、博士夫人の犯罪的天才とを思ひ合せて、私が想像を廻らしたのに過ぎないが、これについては、餘りに穿ち過ぎたといふ非難があるかも知れないことを虞れる。寧ろ、足跡の歸つて居なかつたのは、實際夫人の手ぬかりであつて、犬の足跡は、最初から、夫人が靴の始末について計畫したことを語るものだと思へるのが、或は當つてゐるかも知れない。然し、それがどちらであつても、私の主張しようとする「夫人の犯罪」といふことに動きはないのである。

さて、こゝに一つの疑問がある。それは、一匹の犬が、一足の即ち二個の靴をどうして一度に運び得たかといふ點である。これを答へるものは、先に上げた二つの證據物件の内、まだ説明を

下さなかつた「證據品として其筋に保管されてゐる所の博士の靴の紐」である。私は同じ召使×氏の記憶から、その靴が押収された時、劇場の下足番がする様に、靴と靴とが靴紐で結付けてあつたといふことを、大分苦心して、さぐり出したのである。刑事黒田氏は、この點に注意を拂はれたかどうか。目的物を發見した嬉しきまに、或は閑却されたのではなからうか。よし閑却はされなかつたとしても、犯人が何かの理由で、この紐を結合させて、縁側の下へ隠して置いたといふ程度の推測を以て安心せられたのではあるまいか。さうでなかつたなら、黒田氏はあの結論は出て來なかつた筈である。

かくして、恐るべき呪の女は、用意の毒薬を服し、線路に横はつて、名譽の絶頂から擯斥の谷底に追ひ落され、獄裏に呻吟するであらう所の夫の幻想に、物凄微笑を浮べながら、急行列車の轍にかかるのを待つたのである。藥劑の容器に就ては、私は知る所がない。が、物好きな讀者が、彼の線路の附近を丹念に探し廻つたならば、恐らくは水田の泥の中から、何ものかを發見するであらう。

彼の夫人の懷中から發見されたといふ書置については、まだ一言も言及しなかつたが、これとても靴跡其他と同様に、云ふまでもなく夫人の拵へて置いた偽證である。私は書置を見た譯では

ないから單なる推測に止まるが、専門の筆蹟鑑定家の研究を乞うたならば、必ず、夫人が自分自身の筆癖を眞似たものであることが、そして、其處に書いてあつた文句は、實に正直なところであつたことが、判明するであらう。其他細い點については、一々反證を上げたり、説明を下したりする煩を避けよう。それは、以上の陳述によつて自から讀者諸君が悟られるであらうから。最後に、夫人の自殺の理由であるが、それは、讀者諸君も想像される様に、至極簡單である。私が博士の召使××氏から聞き得た所によれば、彼の書置きにも記された通り、夫人は實際ひどい肺病患者であつた。このことは夫人の自殺の原因を語るものではあるまいか。即ち、夫人は慾深くも、一死によつて、厭世の自殺と戀の復讐との、二重の目的を達しようとしたのである。これで私の陳述はおしまひである。今は唯だ、豫審判事——氏が一日も早く私を喚問して呉れることを祈るばかりである。

x  
x  
x  
x  
x

前日と同じレストランの同じテーブルに、左右田と松村が相對してゐた。  
「一躍して人氣役者になつたね。」

松村が友達を讚美する様に云つた。

「たゞ、いさゝか學界に貢獻し得たることを喜ぶよ。若し、將來、富田博士が、世界の學界を驚かせる様な著述を發表した場合にはだ——僕はその署名の所へ、左右田五郎共著といふ金文字を附加へることを博士に要求しても差支なからうぢやないか。」

かういつて、左右田はモジャ／＼と、伸びた長髪の中へ、櫛で／＼もある様に、指を擡げて突込んだ。

「然し、君がこれ程優れた探偵であらうとは思はなかつたよ。」

「その探偵といふ言葉を、空想家と訂正して呉れ給へ。實際僕の空想はどこまでとつ馳るか分らないんだ。例へば、若しあの嫌疑者が、僕の崇拜する大學者でなかつたとしたら、富田博士その人が夫人を殺した罪人であるといふことですらも、空想したかも知れないんだ。そして、僕自身最も有力なる證據として提供した所のものを、片ツ端から否定して了つたかも知れないんだ。君、これが分かるかい。僕が誠しやかに並べ立てた證據といふのは、よく考へて見ると、悉くさうでない。他の場合をも想像することが出来る様な、曖昧なものばかりだぜ。唯だ一つ確實性を持つてゐるのは、例のP.L商會の切符だが、あれだつた、例へば、問題の石塊の下から拾つた

のではなく。その石のそばから拾つたとしたらどうだ。」  
左右田は、よく呑込めならしい相手の顔を眺めて、意味ありげにニヤリとした。

昭和四年七月二十五日印刷  
昭和四年七月二十八日發行



日本探偵小説全集 第三篇

著者 江戸川 亂歩

發行者 山本 三生

印刷者 杉山 愛二

東京市芝區愛宕下町四ノ六  
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

(長谷部製本)

發兌

東京市芝區愛宕下町  
四丁目六番地

改造社  
振替口座東京八四〇二番  
電話芝(4)自一一二一  
至一一二四番

(刷印舎英秀社會式株)

國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語

國語  
國語

國語

國語

國語

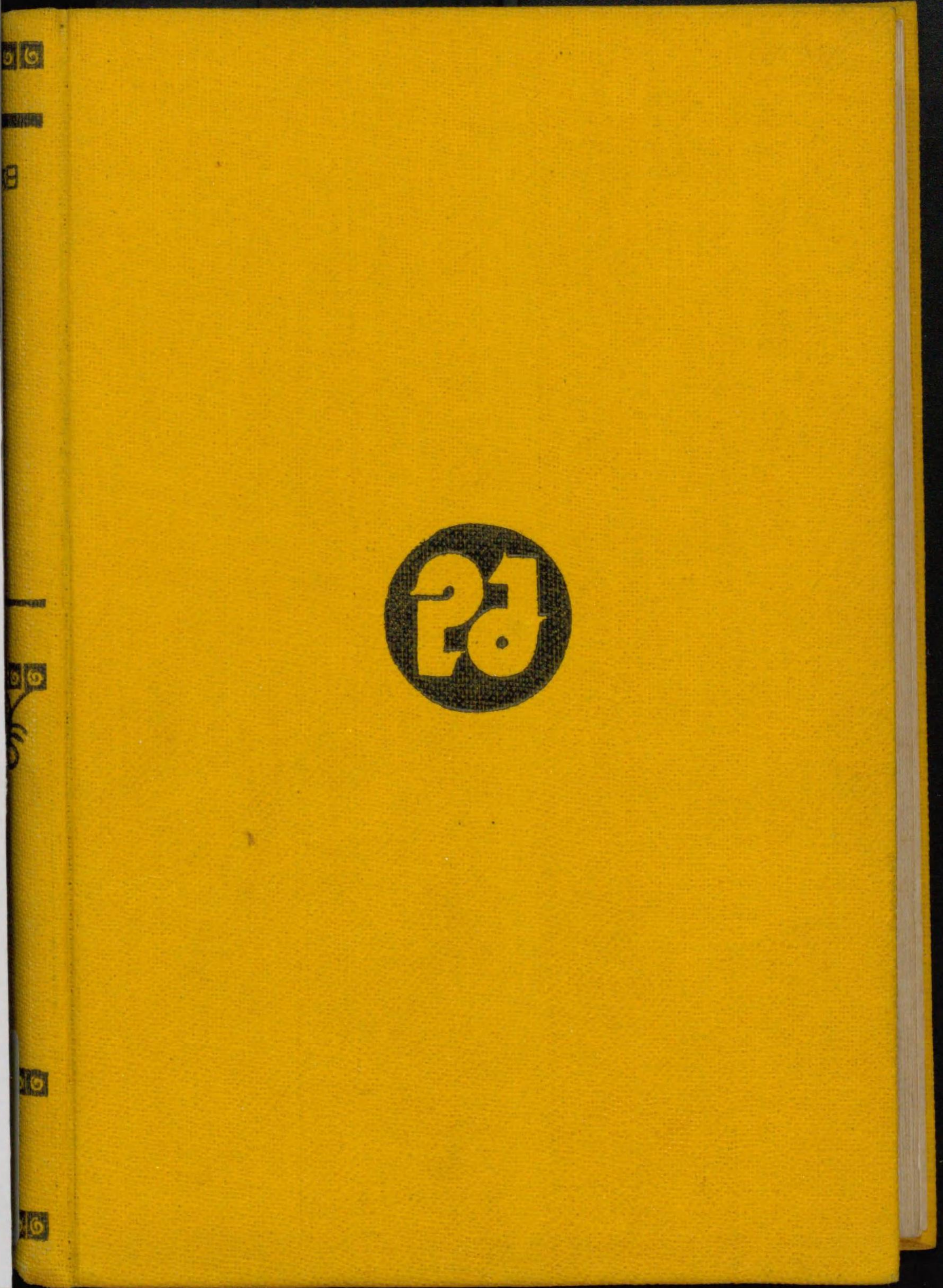
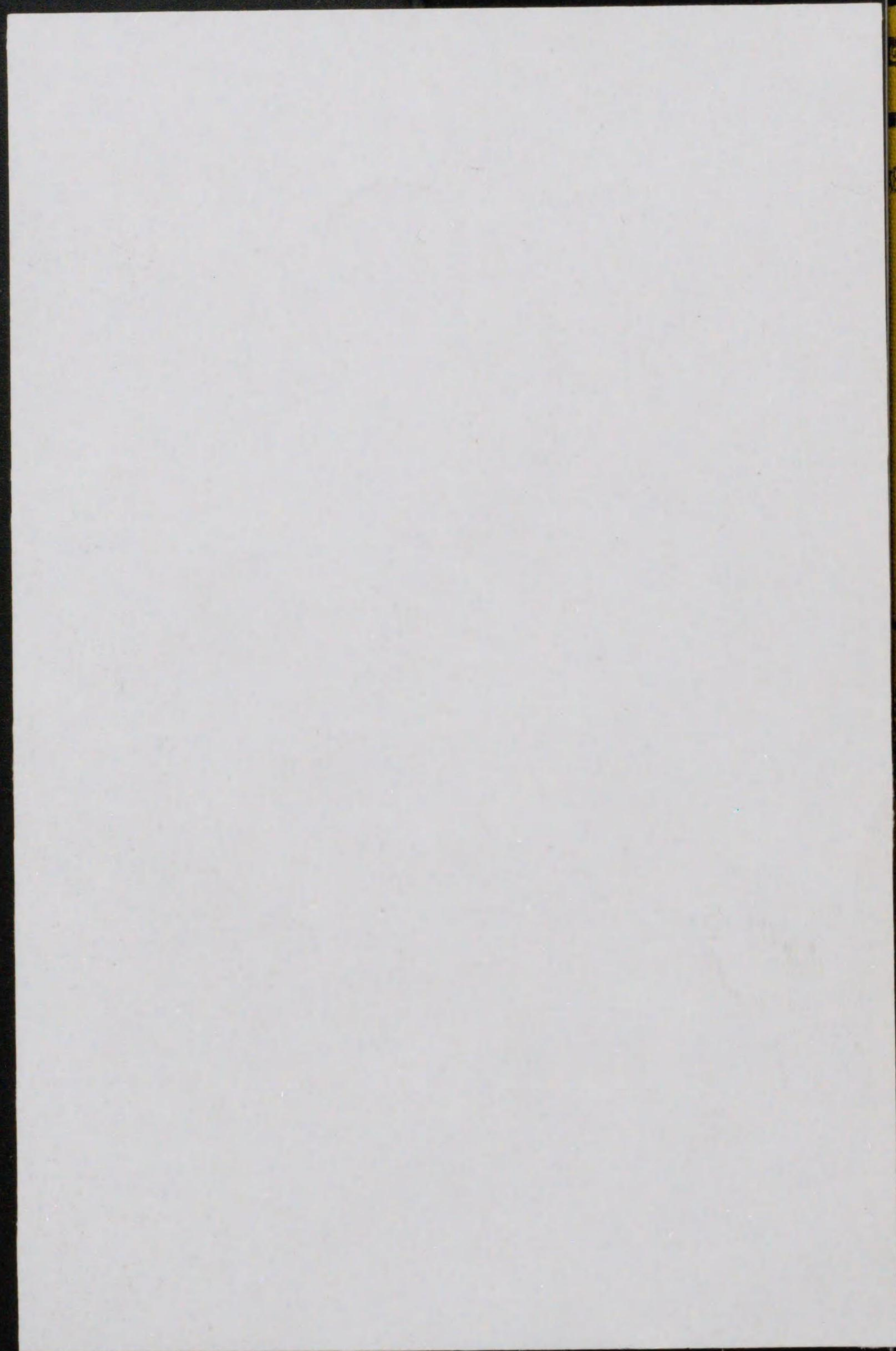
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語  
國語

國語

國語





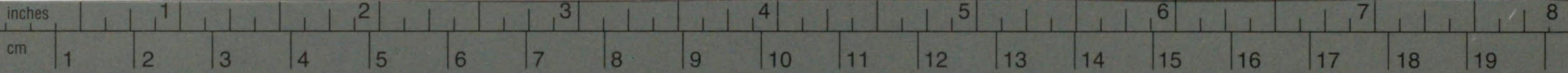
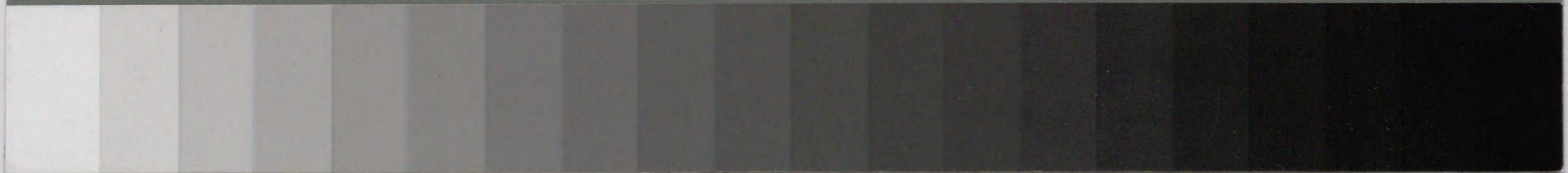


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

